

浜辺の友 一年半の立ち話

大平 忠

Dさんは、五年半前に近くの浜辺で知り合った友人である。今年九十二才になられたが、豊饒とされている。ところが、このコロナ騒ぎで、楽しみだったコーヒーを飲みながらの雑談ができなくなってしまった。しかし、月一回の四、五分の立ち話は一年半続いた。

月一回の立ち話とはこういう次第である。Dさんは月半ばになると、博多駅の「紀伊国屋書店」へ必ず行かれる。Dさん曰く、平日だと昼のバスは人が少ない、本屋にも客はいない、だから大丈夫だ。私がコロナは怖いですから用心して下さいと何度言っても書店通いを止められなかった。

お目当は、翌月の「文庫本出版案内」である。Dさんは、大の推理小説好きで、かつ文庫本しか読まない。今、堂場瞬一と今野敏に凝っておられるが、幅広く読んでおられる。「半沢直樹」の池井戸潤、時には葉室麟も読まれる。来月誰の本が出るか待ち遠しくてならないのである。これを二部買ってきてその一部を月一回私にくれるのである。その度、少しばかり立ち話をする事ができた。この「文庫本出版案内」は活字が極めて小さく、虫眼鏡を使わないと読めない。Dさんは、虫眼鏡で探すがまた楽しいのだと言われる。私もいつの間にか楽しみになってしまった。私は、葉室麟の他に「あきない世傳」の高田郁、「居酒屋お夏」の岡本さとる、「付き添い屋六平太」の金子成人の名前を天眼鏡で探す。

先日、コロナ騒ぎが収まってようやく対面で話げできた。近くのイオンの休憩室で二杯のコーヒーを飲み約二時間雑談をした。

しかし、話といっても他愛のないことばかりである。Dさんは、熱狂的カープファンである。今年はカープも地元福岡のソフトバンクも振るわず二人はぼやきまくった。話の最後は、たくあんはこのものが美味いかの論議になり、Dさんは長崎の「長崎絞り」が一番だと言われ、私は「はりはり漬け」と言って終わった。

他愛のない雑談だったが、やはり立ち話よりは楽しかった。

(令和三年十一月二十三日)